

対話——より人間的な未来への鍵

ヴァシヤ・ヴェリノヴァ

対話とは、たんなる文学的な表現様式ではなく、哲学的な表現様式でもあり、それと同時に、各々の思想あるいは世界観(Weltanschauung)を表明する場でもある。

かといって、たんに考えを交わすのではなく、そのような異なった意見から合意点を見出す場であり、あるいは、他者との活発で価値あるコミュニケーションの力が発揮される場でもある。対話はまた、仮想の「現実」世界と並行した社会構造を作り上げ、さまざまな理念を試みることができるような、特殊な私たちの知的手

段となり得る。それによって、ひとつのテーマに到達することができ、対話の参加者だけでなく、その読者(対話が文字化された場合)も関係していくのである。

まさにこれに当てはまるのが、池田大作創価学会インタナショナル(SGI)会長が、二十世紀後半から二十一世紀初頭にかけて、政界、文化界、宗教界の著名人で行ってきた一連の対話であり、その多くは、数十年にわたって続けられた。これらの対話は日本でまず本(対談集)として出版され、その後さまざまな言語に

翻訳され、ときに再版されたりもした。その結果、同じ精神的価値観を共有する知識人や、非政府組織、社交界のあいだで、これらの対談が知られるようになった。対談の参加者たちは、地球の未来に向けた関心や、精神性に関する考え、そしてヒューマニズム、個人に向けた価値観をもってつながっていく。これが誇張でないことは、池田会長と著名人たちとの対談で示された考えに目を通せばわかる。これら著名人には、アーノルド・J・トインビー、アウレリオ・ペッチェイ、ルネ・ユイグ、ヘンリー・キッシンジャー、ミハイル・ゴルバチョフ、フィデル・カストロ、アンドレ・マルロー、チンギス・アイトマートフなどが挙げられる。彼らはなぜ、自国を超えて全世界の発展に影響を与えてきたのか。それは、彼らが、対話を撮影するカメラレンズの向こう側で、報道や政治的議論や国際政治の場の雑談から距離をおき、特別な啓示を与えてきたからである。その対話はまるで室内楽演奏会のようにであり、未来を生きる世界の人々のために、非公式な意見や、多くの場合より率直な意見をもたらしてくれる。

おそらく、歴史的な不滅 (historical immortality) という考えに基づいているのかもしれないが、いずれにしても、それは型にはまった役を担うというよりも、ずっと誠実で、ときにずっと挑戦的であり、そして本質に迫ろうとしている。

その観点からすると、対話が本となって世に出るとき、そこで交わされた考えはすべて読者にとつての課題にもなっていく。ただ、「今回のように」同じ対談者で二回目の対談が行われる場合、それ自身が池田会長による実践の先例なのだが、私たちは立ち止まってその対談が行われた理由を考え、その内容を分析し、そこに隠されたメッセージを模索しなければならない。対談の読者にとつて、そこに応答することがひとつの知的作業になっていくはずである。

勇気、先を見通す力、知恵の源としての対話

池田会長とブルガリア人文科学の大家で、芸術史家であるアクシニア・ジユロヴァ教授（現在、ブルガリア科学アカデミーの会員を務め、ブルガリアの誇りの源とされ、

池田会長にとって初の女性の対話者である」の対話は三十五年以上も前に開始された。その対談集は一九九八年に『美しき獅子の魂』というタイトルで日本で発刊され、数回の増版をみた。二〇〇〇年には、ブルガリアで *Духът на лъва* (「獅子の魂」の意味) というタイトルで発刊され、二〇〇八年に、すでにブルガリアで何年も前に発刊されていたトインビーとベッチェイの対談集とともに再版された。このブルガリア語の三部作は *XX век Преговори Прозрения* (「二十一世紀・憂慮すべき洞察」の意味) というタイトルで、さらに二〇一四年にも再版された。そして、そのすぐ後の二〇一七年と二〇一八年に、同じ対話者による二回目の対談「大いなる人間復興への目覚め」が、英語版『東洋学術研究』にて掲載されたわけである(日本語版は二〇一七年に掲載)。

では、初回の対談と二回目の対談(新対談とも)のあいだに何が起こったのだろうか。獅子という勝利を意味づけるイメージに寄せたタイトルだった初回の対談と違って、二回目の対談では、なぜ人間性の喪失を危惧し、それを復興させる方法を求めたのだろうか。池

田会長とジュロヴァ博士は何をもって、人間社会が誤って間違った方向に向かってしまったと思ったのか。両氏は、どのようにそこに懸念を抱くようになったのか。それは、実際に確かな根拠があつてのことなのだろうか。

今回の対談の導入部分で、ジュロヴァ博士は池田会長に対し次のような言葉を述べている。

池田先生は、一九六〇年代という早い時期から対話を開始されました。その先見性に、私はあらためて感謝したいと思います。

当時はそれまでの多極的な世界がグローバリズムに置き換わる不穏な兆候に、人々がようやく気づき始めたころでした。人々は新自由主義経済のもとで支払わなければならない、そして今も支払っている精神的・社会的代償の恐ろしさについて、明確なイメージをつかみできていませんでした。伝統的な価値体系と、すべてが許容される自由主義との劇的な衝突が、いかに大きなものであるか

を推測することができなかったのです。

しかしながら先生は、早くからアーノルド・J・トインビー、アンドレ・マルロー、ルネ・ユイグ、アウレリオ・ペッチェイの各氏らとの対談集発行を通して、人間性消失の危機に瀕していることや地球上の歴史観の画一化の問題を提起し論じるとともに、そうしたプロセスへの代替案を提示されました。

先生は対談で、あらゆる人間や文化の代表的偉業を忘却のなかから掘り起こし、伝統と近代性の間に橋を架けてこられました。そうすることによって私たち一人一人に、どの国の生活も文化も、世界の歴史と遺産——この場合、遺産は、現代社会の発展の妨げとなるべきではありません——の一部であるという確信を与えてくださったのです。しかし、はたして、現代社会は、これからも文化的な記憶の単純化を押し進め、そのことで私たちの精神的遺産を軽視し、歴史的重要性をもつメッセージの意味を曖昧なものにしてしまうのでしょうか。

うか。

自分が生きている時代が直面する諸問題に正面から向き合うには、勇氣と先を見通す力、そして知恵が必要です。

先生は、こうした美德をすべて備えておられること、そのうえ、さらに重要なことには、現状を脱却する方途を示すことができることを、世界を舞台にした諸活動や、重要な問題を論じられた対話を通して、証明してこられました。私が、先生との対話の継続を申し出たのは、この事実があったからなのです。⁽¹⁾（太字は筆者による）

では、「対話を継続する必要がある」と両氏に強く感じさせた要因は何だったのか。両氏のもつ先を見通す力、勇氣、知恵については、もはや疑う理由がない。おそらくここで考えなければならないのは、両氏が抱く懸念を私たちがどの程度分かち合うべきなのかという点である。

複雑なネットワークのなかの道徳的向上

対談の開始部分では、とくに喫緊の問題として、現在（バルカン地域をはじめとする文明の）十字路に絡んで、深刻な危機に陥っている欧州連合（EU）とその行く末について議論されている。近年、欧州統合の構想に対する批判が広がっており、その本来の精神を無視し、冷笑してもよいとする状況を目にするようになった。冷戦の象徴とされた「鉄のカーテン」や「ベルリンの壁」が崩壊し、人々は喜びに酔いしれたかと思いきや、どういうわけか、イデオロギーの壁によってその酔いが醒め、悲しみに陥ってしまったているのだ。いわゆる「ハイブリッド戦争」が生じ、それによって新たな冷戦や第三次世界大戦が勃発するのではないかとの声が上がっている。東欧と西欧（の人々）が抱いていた大きな希望が崩壊し、その結果として当然生まれた終末論的な考えが、これまでになく膨らんでいる。今日、欧州の知的エリートは自らを「欧州統合懐疑派」と位置づけ、旧大陸が多くの点で衰退したものとみなしている。デ

ジタル技術による個人のプライバシーへの侵入、世論操作の可能性、情報の虚偽化という恐れから、技術的進歩に対する非難がますます見られるようになった。いまや自由主義を「人類学的過ち」と呼ぶこともできるし、新自由主義の考えを、社会的、文化的、政治的

慣習や、市場の言語、利益、消費者選択を用いた政策とともに、グローバル資本の利益のために大衆を操作したり、地位を確立した金融エリートがモノを一極集中して手中に収めたりするための道具と見ることもできる。

そのような雰囲気はじゅうぶんに分かったうえで、両氏の新対談は、今日よく見かけられるような政治的に決められた方法で出来事を読み解くことに限定しない。両氏は、また別の視点で、私たち読者を「欧州統合」計画の幕開けの時代まで戻してくれるのだ。

池田会長は、第二次世界大戦後の欧州各国の再統合というクーデンホーフ・カレルギー伯爵の考えを発展させ、彼なりのパン・ヨーロッパ計画を提示している。カレルギー伯爵のご母堂は日本人であり、彼自身、仏

教哲学が好きだった。そして、その概念や語句によって世界をより建設的な方向へ進展・変革させることができ、それらが現代思想の一部になるようにと考えていた。その事実から考えてみると、池田会長による提示は、「論理的な選好 (logical preference)」によるものといえる。池田会長は、公共生活で道徳性を展開し、各人の精神変革を促進しようと闘争する仲間の姿を、カレルギー伯爵のなかに見た。この考えは、初対談だけでなく世界に広がるSGIの活動を通して、私たちになじみあるものとして感じとることができる。おそらくそのために、池田会長は新対談のなかで、創価学会が戦後日本の再建に貢献した点、とりわけ精神復興の促進を志した点を強調したのだろう。池田会長は、彼が指導してきたSGIの活動についてこのように述べている。

このことは、日本においても、同じことがいえると思います。とくに、二度と悲惨な戦争を起こさせないために、平和を守るために、民衆が連帯し

なくてはならない。そして、その平和の連帯を築く運動は、国を超えた広がりをもつ、世界市民のスクラムであることが大切でしょう。私たち一九二カ国・地域にわたるSGIも、他の国際的な活動を展開している団体と協力しながら、運動を進めています⁽²⁾。

実に道徳的なこの視点は、合理的に物事を考え、実用主義的な志向性をもつ欧州の人々にとっては、いささか非現実的に聞こえるかもしれない。「この道徳的視点に加え」さらに、池田会長自身は、経済的要素が戦後欧州の統合に欠かせない重要なものであることを認知していた。たとえば、彼は、もう一人の欧州統合の立役者だった、フランス外相で一九五〇年の歴史的な宣言の考案者ロバート・シューマンの活動についても議論している。この宣言には、フランスと西ドイツが石炭鉄鋼をめぐる共同事業を進めていくとの意思が表明されている。これが欧州石炭鉄鋼共同体(ECS)創設の事実上の基盤となり、ここから、欧州連合(欧州経

済共同体）へと発展していったわけである。

池田会長はまた、フランスのジャン・モネによる取り組みも非常に重要と考えた。彼は対談でこのように述べている。

世界大戦をもたらした根本原因の一つは、国家主権の原理です。国家主権にとらわれた各国の状況では、欧州の平和建設や国を超えた共同体の創設は困難であることは明白でした。⁽³⁾

石炭と鉄鋼（の確保）は軍事的に優位に立つための条件だったが、それらを資源として管理するという経済戦略が、当時の政治的局面を補完するようになった。そして、経済的な統合が、強固な結びつきを創り、平等性と寛容さと理解を保証していくための手段となっていた。

池田会長が提案されたような道徳的向上の考えを何よりもまず前提にして、複雑な関係性のネットワークを構築しようとするには、本格的な準備と豊かな社会

経験が必要になる。戦後に生まれた世代の経験は、実際には、戦前に生まれた世代のそれとは異なる。その違いの理由は、現代の欧州の人々にはおそらく懐疑的な態度が見え、市場向け余剰や大量消費主義、たぶん自己満足にあふれた最近の欧州中心主義がそれを定義し直しているからであろう。

ジユロヴァ博士も、欧州統合の考えに関係する時代にさかのぼっては、フランスの文豪ヴィクトル・ユゴーの権威ある人物像や、パリで開催された国際平和会議（二八四九年）での彼の歴史的なスピーチについて触れている。ユゴーはスピーチのなかで、「ヨーロッパ合衆国」という概念を初めて用い、ロマンあふれる欧州の未来図を表明した。彼によると、「将来は」戦争が時代錯誤のものとなり、人々は平和で友好的な世界を生きにくだろう。しかし、欧州がこのような計画に着手できるくらいじゅうぶんに成熟するまで、実にほぼ百年を待たねばならなかった。

ジユロヴァ博士は歴史を概観し、こういった欧州における統合運動の初期段階にブルガリアの人々が関わ

り、イヴァン・シシュマールノフ教授（一八六二—一九二八年）が重要な役割を担ったことを明示している。彼はカレルギー伯爵と旧知の仲であり、ウィーンで開催された第一回パン・ヨーロッパ会議（一九二六年）にも参加した。そしてその翌年、ソフィアの自宅にパン・ヨーロッパ運動の支部を設立した。シシュマールノフ教授の権威と人格により、ブルガリアの政治的、文化的エリートたちの間で「パン・ヨーロッパ」という考えが正当化されていった。シシュマールノフ教授自身、統合した大陸の文化的多様性という考えと、いわゆる「小国」の平等的立場を積極的に支持したわけである。

ブルガリアのEU加盟とそれによる国家のさまざまな公的構造に生じた結果に限って言えば、対談では、ジュロヴァ博士は欧州の計画を批判的に捉えている。博士は、EUが生き残り、創造的な発展を継続するためには、新たな社会的志向の視点をもつ必要がある、と特別に気を留めているのである。

未来のための善の創出

そのような考えは、実はヨーロッパ大陸内外の多くの知識人や、ものごとを正しい言葉で発信しようとする世俗・宗教領域の人々が分かち合っている。国の言語や、大陸の文化的多様性を保持する役割について対談の両氏が分かち合い、その教訓によってもそういった深い考えが生み出されている。その理由として、高度に発達したコミュニケーション技術がある一方で、本当のコミュニケーションがなされていないことが挙げられ、それが現代世界の大きな課題の一つになっている。高度に発達したコミュニケーション技術は、エリートが「オーウェリアン」型のコミュニケーションを創り上げるために用いる。そして、普通の話し言葉にはない、人工的な言語要素を用いていく。それによって、平行現実が創られるのだが、これは体制を支配するにはうってつけのかたちである。フェイスブックやインスタグラム、ツイッターといったソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）は、実のところ、

積極的な財務戦略でいかに効果を上げるのかを教える教科書のようなものである。

かつてコミュニケーションの手段だった言語は、今となつては、操作のための手段と化し、社会の分裂に一役買っている。皮肉なことに、これはグローバル化が進む世界で引き起こされた、一つの大きな結果なのである。グローバルに集中管理する傾向が生じると、取り巻く世界はむしろ一氣に分裂し、都合よく向かいたい方向へ形づけられていく。個人間のコミュニケーションの代わりに、SNSを通じた仮想生活が多くの人々を刺激している。現実世界にあるリアルな社会集団に帰属しているという意識が奪われているために、個人が社会化することが難しい状況に変容しているのだ。

この両対談者が、EUの歴史を掘り下げて読み解こうとしている点については、敬意を表さなければならぬ。というのも、EUの創設、その発展段階、それを方向づけた人物の決定要素を見事に正確に提示しているからである。初回の対談では、考えられる発展の

動きを提案するだけだったが、新対談では、まさにいま起きている現象についてもコメントしている。そこで、「たとえば」世界のグローバル化に対応するように、欧州各国でナショナリズムがますます深まっていることが詳細に議論される。

両対談者は、旧大陸の統合という主目的——戦後欧州における平和の保持と国境の不可侵、経済発展と政治的安定のバランス——を一瞬たりとも見失うことはない。両氏の考えでは、統合という理念こそ、社会が建設的に進展していくための唯一の道である。そのおかげで、人類史上最悪の軍事紛争を経験して十数年で、復興の効果を見た両氏は感じている。統合の功績が最もはつきりと顕れたのが、一九七〇年代の後半、つまりイデオロギーが衝突し、二つの政治体制が競合した時期からであった。パン・ヨーロッパを唱える人たちの論理によると、統合の理念が真に現実のものとなったのは、東西の壁が崩壊した一九九〇年代だったが、実際には、新しいことが一つも成し遂げられずに、事実上その統合バランスが打ち倒されたのである。有益

な善き理念が実現されながら、それによって理想と現実の溝が深まるのは、歴史がよく示してきたとおりである。

グローバル化する世界は新自由主義のもつ模造の価値と結びついており、その美しく飾られた言葉や見た目によって苦い結果が生まれている。これは、精神領域、芸術、教育〔の分野〕でとくに顕著である。両対談者は、こういった社会のもっとも脆い領域で起きている状況について、「ひとまず」悲観的な結論を示している。池田会長は、人々の育成と地球の未来についてこのように述べている。

しかし、グローバル化が進む世界で、さまざまな出来事が、分かちがたい「関係性の網」で結びついています。気候変動の問題一つとってみても、他の所の人々が直面している苦境を看過するような考え方の行き着く先は、やがては人類の生存基盤までも突き崩すような事態を招きかねません。そうした相互のつながりに対する認識と実感を世

界市民教育を通して深めていくなかで、「自分だけの幸福もなく、他人だけの不幸もない」「他国の人々が悲惨に見舞われていくなかで、自国だけの平和や繁栄もない」という思いを、国境を超えて市民社会のなかで分かち合う土壌が築かれていくに違いありません。

そして、弱肉強食の性格を帯びた「競争意識」から、皆が幸福になり、勝者となる「共創意識」への転換——自他共に、より善き価値を創造していく生き方が、共生の「地球社会」を建設するための行動規範となっていくのではないのでしょうか。⁽⁴⁾

そして、次でジュロヴァ博士が恐れているとおり、事態は深刻である。

科学技術と市場に完全に依存している現代世界は、文化を無視して生きようとしています。しかし、このような生き方は文化のもつ精神性への無理解を示しており、そうした傾向性に気がつかないか

ぎり、文化を、単に過去の壮麗な文化遺産を展示する巨大博物館へと矮小化してしまう危険を冒しかねません。⁽⁵⁾

実際に私たちは、いったいどのような世界に暮らしているのだろうか。両対談者は、特定地域（バルカン地域など）の行く末を議論し、特定の歴史的時代（ビザンチン帝国の精神的・文化的ヘゲモニーを特徴とするバルカン地域の中世期など）の概要をまとめるときでさえ、過去の出来事が現代にいかに関影されているのかを忘れずに求めている。両氏の熟考や、説明、結論は、ある基本的な考え、つまり「今日起こっていることは、過去の出来事が長くつながった結果である」との考えによっている。不変の事実が何かあるとすれば、それは、一つひとつの行動が未来の出来事への新しいつながりを生むのであるから、いまを生きる人は行動に責任をもたなければならない、ということである。

精神性と文化的多様性

ジュロヴァ博士によると、バルカン半島は特定の文化的形式と民族的な多様性をそなえた独特な地域である。とりわけバルカン地域には、いわゆる「大国」の地政学的な動きに苦しみ、その地域自体が欧州の「火薬庫」と化した歴史がある。博士は対談のなかで、大陸の特定地域の歴史的局面を考慮すれば、今日の地政学が功を奏するかもしれないと、説得力をもって明示している。そういう意味で、「関係する相手に対して」不適切な態度をとることは不利になっていく。そして、ここ最近起こった事例、たとえば、戦争や教義の対立、主権国家の国境の「再確定」、新たな主権国家の人為的建設（旧ユーゴスラビア地域）、ギリシャが抱えた対外債務、旧ソ連に課された経済制裁なども説得力がある。

バルカン地域に関してジュロヴァ博士は、EUとアメリカ合衆国が、自国の利益だけにしか興味を示さない覇権国としての違った側面を見せていると意見する。〔ただ〕博士は、当然、その覇権的な一極支配を通じて、

現在のバルカンの人々の複雑な生活状況を説明するわけではないことを、明らかにしようとする。バルカン地域は、ヨーロッパとアジアが出会い、多くの地政学的な利害が絡み合う十字路にあることから、歴史のなかで創られた中世の正教文化の形式も、その地域の各国の社会的・経済的發展に影響を与えてきた、と博士は考えている。

博学である両氏はさらに、出来事の全体像を展望してくれている。両氏は政治的事実にのみ限定するのではなく、顕在化した部分を超え、現象の本質を求めようとしている。引き合いにされた歴史や文学や国家の精神性を通じて、私たち読者は、世界を変えるかどうかは、結局のところ、その未来に向かって責任を果たす一個人によるのだと思うようになる。池田会長は、フリスト・ボテフやイヴァン・ヴァーゾフの作品を例にブルガリア文学の幅広い知識を明示している。そこでは、自己犠牲の意思、道徳的なストア主義、愛国主義といった民族的特徴が明らかになった。会長は、これらの特徴によって、ブルガリアの人々が歴史の激変

する時代を生き残ることができたと考えている。

ジュロヴァ博士は、バルカン半島の精神生活のイメージを深めていく。苦々しい思いで語る博士の言葉のとおり、バルカン地域の国境は自然物によって決まったことがなく、常に政治的野望が絡んだ外的要因によって確定されてきた。この政治的動態によって、バルカン地域の国民は、活気のある、断固とした、しかし、うたぐり深くもある性格をもつようになった。博士によると、欧州のなかでこのような小さな領域に多くの国々を抱えている場所はどこにもなく、これこそがバルカン固有のメンタリティを創り上げる要素となった。バルカン地域の人々の歴史的な運命はだいたい他国の利益によっているという意識が、特異なメンタリティ、すなわち博士が誇張しているところの「十字路のメンタリティ」を創り出してきた。さらにいえば、それが遊牧の精神、すなわち転々として何かを永遠に捜し求めるような人の精神というメンタル構造に深く流れ込んでいる。おそらくそれは、生き残り、内なる自己を保持し、それと同時に、あらゆる状況に適応し、さま

さまざまな困難を克服する力の基礎になるだろう。それがプラスの質かマイナスの質かは判断できないが、バルカン地域に生まれた誰もがそれを避けられないことは前提としてある。

このように対談では、特定地域の行く末が概観され、欧州への統合をめぐる課題について説明されている。ここで池田会長は、哲学、社会科学、歴史（に関する知識）の分野で、古代ギリシャが欧州の人々の精神的進展に大いに貢献したことに言及している。それと同時に、両対談者が分かち合っている基本的な考え、すなわち精神性を人類の未来の中心にすべきだということ、社会の長期的な発展のために文化的多様性を保障すべきだということ、経済「だけ」で発展の方向性を決定すべきでないこと、などを似たような事例から再度指摘している。池田会長が強調するとおり、「貪」は攻撃性を生み、人々を不幸にし、社会の基礎を破壊するのだ。

共生社会のための精神革命？

対談では、地政学も話題にあがっている。地政学を

考慮しなければ、社会問題へのまともな解決方法を提案することなどできない。他の地域と同様に、欧州の未来が世界の力の均衡にかかっていることを、両氏はとりわけ明確に強調している。他に議論されている話題として、ロシアに対するEUの態度や、難民の危機、地域の軍事紛争が挙げられる。両氏にとって、このような地域の危機的状况に対処する唯一の方法は、慎重な決定を図ることを目的として、個人の尊厳を重んじ、国家主権を重んじ、寛容の態度をとることである。両対談者は考えをめぐらせる際、常に、人間とその問題に、ダイナミックに変動する世界の人間に、そして意識的・無意識的に生き残りをかけて葛藤する人間に目を向ける。この文脈で、両氏はかなり論理的に、「人間的な社会の復興」に向けて、一人ひとりに大いなる希望を託していくのである。それゆえに、尊敬を集めている著名人であり、世界に著名な美術史家である「両氏の」個々人の見解——それはときに、全体像だけでなく、ずっと多くの詳細な情報をもたしらしてくれるが——を通して、地政学的、社会的な大きな課題の行き

詰まりも、おそらくほとんどの場合で突破していくだろう。池田会長は、異彩を放つ仏教の特徴をもって、特定の問題に詳細まで注目し、人間生命の奥底からそれを探求する。ジュロヴァ博士もまた、バルカン地域の刺激的な性格と直感をもった一人として、多くの場合で、おもに自身の地域や国、そして（芸術家やその作品の話題になると）固有の人格という観点で、起こった事実を提示していく。これによって対談は独自の多様性を生み出し、「それゆえに」私たちは、議論されている課題が複雑であり、はつきりとした解決方法を見出せないと再度強く思ってしまうのだ。

両対談者が、仮にこの状況を打開する方法を求めず、それを提示しなければ、きつと自分自身や自身の価値体系に対して忠実でいることもなかっただろう。両氏はこの方法を、世界の文化的多様性と人類が生来もっている精神性を保持するための、長期的な戦略と位置づけている。その方法では、教育や文化政策に関わるべき社会にあつて個別の活動が特定され、家族や個人の調和のとれた成長が重視される。これはすべて、一

つの基礎条件がそろえば可能である。すなわち、利益という名のもとにすべてが許されるような市場「要素」を制限することであり、おもに社会領域のなかでより強大な国家の介入に向かわせるような新自由主義経済を変えていくことである。

だが、閉じ込められていた瓶から飛び出し、願いを叶えてくれるという（「イスラームでいう」）精霊を、私たちはコントロールできるのであるだろうか。先を見通している両対談者は非常に穩健的で、悲觀的でさえあり、そういういった国家統制主義的な社会計画に対して困難が起ることに気づいている。異なる国々——経済をけん引する欧州の各国から開発度の低い国々いたるまで——から、より緩やかな市場条件に戻すべきだとの考えや、社会改革について直接語るべきだとの考えを擁護する声が上がっているが、いまだそう願っている程度の範囲にとどまっているのだ。グローバル化の慣性やそれに付随する自由主義市場経済など、そうしたやすく乗り越えることはできない。私たちが近い将来、一つに調和のとれた世界や、物質的利益よりも精神性が

重要になっていく時代を目の当たりにすることなど想像できないだろう。グローバル化している世界は、家族やジェンダー、伝統、国威といった普遍的な人類の価値を、何か新しいものに替えることなく破壊してきた。すべてをタブー視し、拒絶し、排除する要素が解き放たれてしまったのだ。しかし、一人が自身のなかに偉大な、そして普遍的な、内的、知的、精神的変革を起こすことで、自身の未来、地球の未来のことを自覚し、責任感をもち、調和をもたらす人になっていく。ただ、それはまだ理想郷にすぎず、そのような社会プロジェクトは始まってもないのだ。そこには、世界の異なった国々の間に見られる経済的不均衡に関係した要因がたくさんある。すなわち、一超大国であるアメリカ合衆国による一極支配の世界を創ろうとする動き、それに対し、ロシアやアジア各国あたりに中心的な影響力を築こうとする流れ、さらに地域の軍事紛争である。そして何よりも、天然資源やエネルギー、生産能力や大勢の大衆を管理しているグローバルな金融エリートが存在である。

個のエネルギーとしての宗教と教育

おそらくそれゆえに、両氏は、対談の重大な部分を宗教——社会をととのえ、負の衝動をチェックする手段としての宗教——に向けたのだろう。両氏の考えでは、宗教は人間性を保つための効果的なツールとなり得る。ジュロヴァ博士はとくに、貧者や弱者の保護を訴える教皇フランシスコ一世について語っている。博士は、世界の不正義を積極的には正しようと努める教皇の姿に注目する。両氏とも、著名なキリスト教神学者や仏教哲学者を引きながら、互いの考えの合致点を見つけ、精神性が優先される社会モデルのなかに組み込んでいけるような宗教の輪郭を描いていく。そして、人間の位置づけやその選択についての問いを、それぞれの宗教や哲学のなかで吟味していく。たとえば、キリスト教についてはカトリックや正教会の顕現と善に向けた考え、仏教については個人の内的な自己向上の道というように。そういった点で、キリスト教と仏教は、「不均衡な現代世界を是正する」という社会的に決定さ

れた現在のどんな思想とも見事に競合していくことは疑いない。

古代より宗教は、社会関係を強固にする要素とされてきた。宗派が社会体制の軸となり、国民性を保持してきた事例も多くある。その保守的な側面や歴史のなかをどのくらい生き延びたのかは、何世紀にもわたって蓄積された情報や社会経験、異なった歴史的状況への適応能力によっていく。人類史上の長きにわたって、特定の地域で実際に宗派が正当化され、世俗権力の地政学的な策略を支えるようなことさえあった。この点に関してとくに重要なのが、対談で事例として語られたビザンチウムとカトリック教会である。教会組織は、現在の政治家に、忍耐、寛容さ、自制を教え、社会のなかでケアするよう彼らに促す良き学校となるだろう。加えて、教会組織の超越性がとても必要になる。超越性は、今日の世界に欠けており、その点で、教会組織は有益となってくるだろう。

この対談で提起されているもう一つの課題が教育である。教育は永遠の課題ともいえる。産業化の時代に

は、訓練を受け技術をもった働き手の需要が高まったため、広く教育を受けることができた。しかし、技術を過信する二十一世紀にあつて、目指すものが曖昧で、さらに期待外れの結果ばかりの実験に頼って、いかに問題を解決することができるようだろうか。教育とは、たんなる知識ではなく、社会経験や社会全体の情動的記憶、人間を一つにするために必要な社会の神話をも維持するような手法といえる。もともと「現場は」保守的であるため、自らの運命と向き合うことのできる人格を形成することが要求される。世界が精神的危機にあえぐとき、それによって世界の脆い構造にも必ず影響が出てくる。この課題に関する両氏の立場は明確である。つまり、若者への教育なしに、また各人の生涯を通じた絶え間ない向上なしに、未来はないということである。ただ、両氏によれば、教育プロセスには、世界の課題に対処できる人格を「形成する」ための高い道徳的基準が具わっていなければならない。さらに、しつけと教育は表裏一体であり、同じプロセスに位置づけられるべきものである。

それは可能なのだろうか。池田会長が指導する組織にあって、その実現はきわめて人間的な目標として捉えられている。池田会長はこう述べている。

宗教と教育は、人間の偉大な可能性を開花させ、高めていくために必要な二つの翼であるといえましょう。⁽⁶⁾

これらの翼は、一人ひとりの人格に大いなる希望を乗せていく、実に人間的な規範である。個人の（情動的・知的）活力は、現実世界を変革することができ（その潜在力をそなえてい）ると考えられるのだ。

おわりに

池田会長とジュロヴァ博士の二回目の対談を読み終えるまで、歴史のなかの長く険しい道を渡っていくような感覚を抱く。欧州統合に向かって樂觀的な第一歩を踏み出し、計画を進めていくことが厳しいとわかりながら歩みを続け、激変する晩年には失意や悲観主義

に行き着くことになる。しかし、まだそこで終わりではない。この両対談者は、見事な博識と余すところのない知識をもって、眼前の事実を検討していく。

そこでは、もう一つの語りというものが、両氏の議論をとおして並行して行われる。つまりそれは、葛藤と思想の展開である。精神性は生の意味を失わずにあり続けるのか——両対談者が抱く懸念を感じとり、理解するのに、読者は哲学者や政治家や社会学者となる必要はない。両氏にとつて、人間は世界の土台である。公平な目をもった読者はみな、両氏の対談に目を通し、そこで分かち合った理念について熟考するとき、はじめは人間精神の昇華や自己改革という理念が抽象的に思えたとしても、人間への信念と知性、芸術、美、人間の意思を取り戻すとの両氏の使命に触発されることだろう。仮に筆者の考えにすべて賛同しなくとも、人間の道徳性や思いやり、創造への欲求によって活気づいた世界を夢見たいと少なくとも思うだろう。それがまさに変化への第一歩なのだ。ならば、試してみようではないか。

〔 〕 内は邦訳に際しての補注

注

- (1) 池田大作／アクシニア・D・ジュロヴァ「大いなる人間復興への目覚め(上)」『東洋学術研究』第五十六巻第一号、二〇一七年、八―九頁。
- (2) 同前、一七―一八頁。
- (3) 同前、二三頁。
- (4) 同前、五四頁。
- (5) 同前、三三―三四頁。
- (6) 池田大作／アクシニア・D・ジュロヴァ「大いなる人間復興への目覚め(下)」『東洋学術研究』第五十六巻第二号、二〇一七年、五〇頁。

(Vassja Velinova／ソフィア大学附属イヴァン・ドゥイチェフ記念スラヴ・ビザンチン研究所所長)